



名北の空の下

署長から
みのろ
こしかわ
越川 稔

名古屋北労働基準監督署長

昨年暮れ、労働基準監督官同期の有志メンバーが集まった。20年、25年、30年と節目ごとに開催して4回目であったが、お

歴史の中で考える



そらくは最後の同期会になるだろう。職業生活もこれだけ続くといろいろなことを見聞きしてきた(つもりだが)、系統的にとりかかるといっても、うまく思い出せないものである。

画競争入札の説明会の最中であつた。長い揺れが続く中で、説明会の参加者の1人が「震度7」と話した。「震度7」子どもの頃、理科の授業で習った震度表の最強ランクのはずである。歴史的事件だ。

は、この原稿を書いている今も、いつ収束するか、いや、落ち着きを取り戻すかもわからない状態である。

この先どうなるのか、どうするのか、問われているのではないかと多くの人が思っているのではないだろうか。

今の仕事に就いて日も浅い頃、北炭夕張新鉱での爆発事故があつた。多くの労働者が命を失い、北炭の倒産へとつながつた。そのとき、日本の商業用石炭の採掘はそろそろ終わるだろうと思つたがその通りとなつた。

そのほかにも法律の制定や改正(制定よりも改正の方が歴史的に意味がある場合もある。男女雇用機会均等法の改正における間接差別に関することやセクハラにおける派遣先事業場の措置義務等はその例)、衝撃的な事件・事故。労災の支給決定例(新幹線内刺殺事件、マラソン日本代表被災事案、日本海中部地震事案)

等にも、変化の流れを感じた記憶がある。

それにしても原発である。ドイツも、イタリアも脱原発の旗幟を鮮明にした。大戦前の三国同盟を引いて日本もという話もあるが、方向付けについては大方の国民が理解できるようなものになつて欲しいし、冷静な議論が必要だと思う。先の日米開戦について、海軍だけでなく陸軍の指導者層も戦争回避の判断が主流だつたと最近のテレビ放送で知らされた。しかし、戦勝ムードの国民世論をばかつてか、口にする事ができなかった。言い出せる雰囲気ではなかつたということらしい。

イラスト・森沢康代

学生のころに歴史を習つたが、年号と事件をつなぎ合わせて暗記したり、社会の変化なども記憶したものであつた。

3月11日に東北沖で大地震が発生した。東日本大震災の始まりである。折しも新年度の事業の企

だが、これで終わりはなかつた。ここから始まつたのである。記録上最大級の津波は、大自然の力を見せつけた。また「多重防護」「絶対安全」と誰かが言つた、超近代施設も破壊して呑み込んだ。この原発という施設